

会員の広場



民主主義の死に方

瀧口 勝行（東京）

「混乱の時代に頭角を現し、もつとも卑しい本能に訴え、人々の深い不安を利用する人物」、「危険なまでに衝動的で、邪悪なまでに狡猾で、真実を踏みにじる人物」、「あからさまな嘘をつくが、いくら反論されても押し通し、最後は人々もそれを受け入れてしまう」―これは、

先のアメリカ大統領選を描写したものではない。シェイクスピア学者グリーンブラットが、著書『暴君』の中で描き出した、「マクベス」、「リア王」、「ジュリアス・シーザー」などの作品に登場する専制君主たちを描写する一節である。遠い時代の文学作品の登場人物を描いたものが、どうにも生々しく感じられるのは、それが現代民主主義の悲しい現実と重なって見えるからであろう。

レビッキ&ジブラットは、『民主主義の死に方』において、民主主義が、独裁化してゆく現実を取り上げ、その原因と過程を分析した。その驚くべき結論は、「民主主義の後退・専制化は、選挙によって始まる」そして「民主主義の破壊は、民主主義を利用して行

われる」ということだ。確かに、選挙によって選ばれた一国のリーダーの独裁者への変身は、ロシア、ペラルーシ、フィリピン、ベネズエラ、トルコ、ハンガリー等の国々で、実際に起きていることである。そして、彼らが独裁化を進める共通の手段は、「司法を抱き込む」、「メディアを黙らせる」、「憲法を変える」など、民主主義の根幹を為す制度を変形し、それを悪用することだ。われわれは、これを他山の石などと考えるはならない。国会を開かない、検察人事に介入する、公的記録の改竄や隠蔽を行う……こうした一連の行為は、わが国の民主主義が、すでに危機の淵に深く入り込んでいることを示している。

シェイクスピアの暴君たちは、基本的に無

能なため、権力を握るとたちまち社会が混乱し、いずれも民衆によって打倒される結果となっている。しかし油断は禁物だ。ジョージ・オーウェルの『1984年』には、独裁が完成の段階に達した恐るべき結末が描かれている。独裁者ビッグブラザーは、反対者の弾圧などという非効率な手段は取らない。人間は言語によって思考し、思考によって行動するのであれば、言語自体を変えてしまえば良い。こうして生まれた新言語「ニュー・スピーク」には、3つの基本テーゼが謳われている。

その1、戦争は平和なり。その2、自由は隷属なり。その3、無知は力なり。言葉、そして自由な言論こそが、民主主義の最後の砦である。